

学 位 論 文 要 旨

氏 名 高畑 芳美

題 目 主体的な子育て・親育ちのための子育て支援に関する研究

—0, 1, 2歳児の親子の遊びを中心に—

現代社会では、地域で自然に親子が交流し子育てを支え合うことが難しい。育児不安や孤立した子育てが問題となり、地域で親子を支える仕組みを意図的に再生するための子育て支援が様々に展開されている。しかしながら、実際に子育て支援の場を利用する親子の遊びについての研究はほとんど見当たらない。子育て支援の場における0, 1, 2歳児の主体的な遊びの実態と子どもに関わる母親の行動についてエピソード記録を基に明らかにし、適切な子育て支援のあり方を提示することが本研究の目的である。

第1章 研究の背景と目的では、先行研究や日本の施策の動向を整理した上で本研究の意義を示した。子ども・子育て支援制度で「保育の必要性がない」認定外の0, 1, 2歳児親子には、子育て支援事業が用意されている。0, 1, 2歳児の母親のインタビュー調査から、保育参加型のプログラムやイベント中心の子育て支援は、0, 1, 2歳児親子にとって受け身的で所属意識が持ちにくく、主体性が維持しにくいという問題を指摘し、課題を明確にした。また、直接子どもと保育する保育者や、利用者に支援サービスを提供するケアマネジャーと違う役割が求められる子育て支援者の役割を先行研究から概観し、研究の目的、方法及び内容構成を示した。

第2章 主体的な親子の遊びを読み取るためのエピソード記録では、本研究の主題である0, 1, 2歳児の主体的な遊びについて論述した。親子の遊びを読み取り評価する記録方法を検討した結果、ニュージーランドのラーニング・ストーリーを援用した、独自の親子の遊びのエピソード記録を開発した。0歳児親子2組を対象にエピソード記録を通した子育て支援を実施した。親が我が子の視点に立った遊びの見方が出来るようになる過程から、エピソード記録の有用性を明らかにした。母親自身が直接我が子のエピソード記録を書くことについての課題も確認できた。

第3章 0, 1, 2歳児の主体的な親子の遊びと母親の関わりの様相では、第2章での課題を活かし、支援者が書くエピソード記録を実際に大学の子育て支援ルームの利用者に導入した。1年半の間に収集した0, 1, 2歳児の親子の遊びのエピソード記録155事例をKH Coderを活用した量的分析と、各年齢に特徴的な動きに着目した質的分析から、0, 1, 2歳児の主体的な遊びの様相を明らかにした。同様に、子どもの遊びに関わる母親の行動について、各年齢と愛着的関わりや受容的関わり等8つのコードとの関連を検討した。その結果、以下の4点を新たな知見として見出した。1点目は、0, 1, 2歳児の主体的な遊びには年齢に特徴的な「動き」が見られた。同時に、0歳児にも関わる人を意識し、相互作用により遊びが持続する「他者を意識した動き」が出現し、改めて0, 1, 2歳児の遊びに母親が関わる重要性が示された。2点目として、0, 1, 2歳児は、自分が獲得した段階の動きより高度な段階の遊びに挑戦していくことである。このことから、安全面経済面を重視する子育て支援の場の環境構成を見直す新たな知見が得られた。3点目に、0, 1, 2歳児は、共に生活する母親の真似を遊びとして取り入れていた。この気付きから、母親は、日常的な生活の中に子どもの遊びの原型が存在し、日常的な生活が子どもにとって貴重な遊びのための学習となっていることを再確認できる。4点目として、支援者が記録した親子の遊びを読む効果があげられる。母親は、我が子の遊びの記録を読むことで、子どもの見方や関わり方、遊びの意義や自身の存在意義を客観的に捉え直すことができる。

第4章 主体的な子育て・親育ちへの支援と今後の課題では、本研究の主要部分である第2章と第3章の研究成果を総括して、今後の課題を示した。子育て支援の場において、0, 1, 2歳児が主体的な遊びを展開し易い物的・人的な環境の設定が重要である。母親には、エピソード記録を通して子どもの主体的な遊びの意味への気づきを促し、発達に応じた関わりを意識するための具体的なモデルとして、他の親子の関わりに注意が向くような支援が必要である。エピソード記録の収集と検証を積み重ね、主体的な親子の遊びを記述できる支援者の質の向上、母親自身の主体性を活かした母親による記録の在り方、親子が地域とつながるための支援を含めた実証的研究が今後の課題である。